

ニューカマーとしてのさせられた認識

安 錦 珠

私は日本人と結婚して七年目に入っている。七年目に入ってやっとニューカマーという認識をせざるを得なかった。それは回りからの雰囲気からうすうすと、何か変だな、何か違うなあと感じていたのが、今年から名目はどうあれアジア社会学の勉強を始めながら得た認識であった。

結婚初期はただ外国という好奇心を楽しむ事で夢中だった。日本の良さ、韓国との習慣の違い、国民の好みの違い等々。色んな事で楽しんでいながら、お互い日本での外国人同士のいろんな国の人との出会いもあった。実に私の状態で自分の母国では味わえないものが沢山あった。

私としては、夫は世界中の中の一国である日本人で、日本は夫の国。

私には初めての外国であった。

好奇心の豊富な私には取っておきの素晴らしいものだったかも知れない。もちろん韓日感情が歴史的にぶつかったことは承知の上としても、個人に対して当たる問題ではないので、私の結婚については回りはどうあれ、私自身には悩むことはなかった。

そのはずだったのが、他の外国人には感じる事のないものがあつた。

在日韓国人に対しての日本人の目が私にも向けられた。どこに行っても聞かれるのは、「お国はどこ？」と言つう質問に

「韓国です。」という答えに

「この辺も韓国人は沢山いるのよ」「あーそうですか？」で

私はただの外国人ではなく、そのカンコクジンと云ふことだ。

勿論、私は韓国人である。しかし、その韓国人、朝鮮人と言う言葉には世界中の国の一つを呼ぶ国名ではなく、正体不明ではあるが、ある部類を称するように聞こえる。続きの話がもっと明確に伝わってくる。

“あの人は日本名を名乗っているが、話のトーンがやっぱり違うのね。私には判るの。その人が言わなくても。”

そのような話を何度も繰り返し聞き慣れながら、私もただの外国人ではなく在日韓国人の一人になるのかなと認識させられる。そこで、少し抵抗感を抱く事があった。幼い時からニュースで日本での在日韓国人の生活ぶりを見て（一番印象に残る例：小学生がいじめにたえられなくて遺書を残し、学校の屋上から飛び降り自殺をした）、苦しそうに見えたからであった。その時の疑問点は『何でそんなに差別されながら、帰って来ないんだろ？』であった。（その回答は、勉強会に参席して少し納得出来るようになった。）その苦しう見えた在日同胞のグループの一員になったのであった。

渡日初期に抱いていた外国への好奇心の脹らみはだんだん現実にはめられるような気の遠さも感じた。

在日七年目に入り、二人の子供の育児からも少しは自由を得て、日本の社会を勉強する機会に会った。今ま

では『在日』と言う抽象的な観念でしかすぎなかった単語が本を通して、話を通して少し彼らの生きてきた生活ぶり、考え方にふれる事が出来た。

私は在日のニューカマーの一員である事が逃げ切れないう迫った状況であることを感じた。色んな生活史に先ず驚いた。国籍を隠す人、隠さない人、日本の通名で暮らしている人、韓国名で暮らしている人、職場の問題、結婚観、韓国と北朝鮮の混じり暮らしに又、驚き、韓国人同士の間地域性問題等々。

韓国で育って成人になって、日本人とただの国際結婚して来た私には国際結婚以上の問題を抱えていることに気がついたのである。

これから何か変わった状態がないかぎり、日本人と結婚した私には日本は第二の国でもあり、わが子の半分の母国でもある日本の中で永く生きていく事になるだろう。その為、私は日本の中でどう生きるべきかを選択せざるを得ない。

今までの生活は何事でも母国での生活と結びつけて考

える習慣があった。それもそのはずで友達というものがほとんどが韓国人で、来日年度は少々違ってもお互い五年以内であった。一般の主婦がするように、子供の年齢に合わせて子供遊びの相手の親がお互いに他国での友達となっていた。

彼女は韓国からの旦那の仕事の転勤で付いて来た奥さん達。あるいは旦那の留学に付いてきた奥さん達で、日本での生活は子供を持ち、専業主婦で他国での子供の世話が精一杯だったと思われる。私もその当時、日本での生活も慣れないうちに二人の子供を産み、又育児の必要品揃えにも戸惑う時期であった。そんな事が子供の為にも母親の為にも友達をつくる事で、子供は片言葉でも韓国語を覚えてくれるし、親は互いの短編的な知識でも交換するようになり、親子ともに良いことであった。

自然に彼女らとの会話で日本の生活は韓国の生活を中心にしての見る目を持つことになっていった。

私が日本に来たのは一九九〇年一月だったので、韓国で生活していたのは一九八九年一月までとなる。結局私は韓国の八〇年代までしかわからない事になる。その為、私は八〇年代の韓国を基準にして見る癖がある。年一回程度の帰国で見る韓国、聞くところによる韓国はまだ私には実感出来ない部分があって、今の韓国と私が来

日する前の韓国との gap が少々あることを先ず言っておきたい。

私が来日する前の韓国との品物の違いに先ず目が届いた。勿論私は韓国では育児、家事をやった経験がなかったので、韓国での育児と家事の世界はよく判らないのだが、とにかく日本の生活の便利さに感動したと言うか。その他にも彼女らとは日本と韓国の物の考え方の違いも色々と言った。

又、未だに踏ん切りが付かないのは、出産後の妊婦への対応の仕方である。自家の母から聞いた妊婦のあり方、対応の仕方と日本での習慣はかなりすれ違いがあった。それに私の出産に対して姑の手助けは貰ってないと思う。まだまだ若いと思う私の体が時々年寄りのように腰や膝に無理を感じる時は日本での出産後の管理が悪かったと日本のせい、姑のせいに廻すことがある……。

そうやって韓国人の友達とつき合う事で、私は日本に居ながら日本の内面を見るよりも韓国人としての価値観で日本の外面を見直し、観察していた。その当時はそれでいいと思った。彼女らと違う立場の私は日本の内面を見るのが怖かったかも知れない。それは「在日韓国人」「いじめ」この二つの言葉がイコール・イメージになって真っ先に走っていたからだったと思われる。ただ一生

外国人としていた方が楽だと思ふような気がした。それで彼女らと同じ気分ではないとした。

だが、彼女らは旦那の在日期限が満了することで国へ帰っていった。

親しかった友達を二・三人送ったあと、残ったのは結婚して来日した当時にも感じなかった寂しさと、私は日本人と結婚したんだという実感であった。夢から現実に落とされたような気分だった。

私の子供も少し成長して幼稚園に入る年頃になって、又私は日本での生活を何も判っていないんだなということに気が付いた。

私のお姑は私が近所の主婦たちと親しくなることを恐れていた為、私は近所の人とは挨拶以外の会話を交わしたことがなかった。私の住んでいる地区の教育の成り行きがどのようなになっているのかが全く判らなかつた。

このままでは子供の為にもいけないと思ひ、近所の人に幼稚園の情報から聞くようになった。話が長くなると私の発音とか日本語の話し方がおかしくなると当たり前の様に聞かれるのは『お国はどこですか?』である。私のお姑はそれを近所に知らせたくなかつたのでいつも私に『近所の人にあれこれ話すな。この近所はうるさいんだから』だった。私もなるべく近所でのお付き合いは

避けていたのだが、子供の為となると母性本能としてじっとしていられなくなってきた。又、私の長女は本当におとなしい子で、悪く言えば友達作りが下手だった。そのくせにすごいさびしがりやだった。そんな娘を見ながら母親がしつかりしなきやと思つた。

その時までは私は嫌でもお姑の言うことを無視することは出来なかつた。それは私が韓国から日本人と結婚してきて一時的でも日本で生活していくつもりだったので、何にも知らない日本の風習、慣習などを無視する事は出来ないと思つた。

そのようなことが私にとってはお姑からの話だった。